

ドラマを教材とした、大学での英語教育

市川 節子

新潟大学教育学生支援機構非常勤講師

履修する学生数が 25 名を超える英語クラスにおいては、一人一人の学生が埋没しがちである。こうした大人数クラスにおいても、「身体に根ざしつつ身体を超える」という言葉本来の性質を踏まえた授業を展開し、受講生全員の英語運用能力を、身体表現と連続する自然な形で涵養し、かつ大学生にふさわしい考察力を養成するため、1. 大人数が、同時に、学期を通して継続できる作業をする、2. この作業は、自律的、個別的である、の 2 条件を満たす教材として、優れた作家のドラマ作品（ストレート・ドラマ）が、非常に効果的であると考え、これを採用、授業を実施した。筆者は、すでに幾つかの大学やサークルにおいて（学習者数 10～30 程度）、ドラマをテキストとした英語教育を展開して効果をあげてきているが、ここでは、新潟大学における 2010 年第一学期の試みを報告する。

20 世紀アメリカの劇作家、テネシー・ウィリアムズの作品 *The Glass Menagerie* をテキストとし、学生がドラマの役割をみずから追体験するプロセスを通して、これまでの語学教育ではおろそかにされがちであった、英語表現を、リアリティを確認しつつ理解し、発する英語に感情を込め、英語によって状況を分析するトレーニングを試み、かなりの成果を上げた。

キーワード：大学英語教育、ドラマ作品、ラーニング・コミュニティ、言語（英語）運用能力と身体表現、読解・考察力

1. はじめに

新潟大学における一年時の必修英語科目の定員は30名から40名であり、場合によっては、履修者が40名を超える。これは、履修学生一人一人の英語運用能力を育成するには、大きすぎるクラス・サイズである。カリキュラム上は、学生は、このクラスの上に、いくつかの英語クラスを積み重ねて学習することができる仕組みになっており、上級クラスは、履修者の人数も少ないものが多い。しかし、必修の基本クラスで英語運用能力を適切な形で磨くことができなければ、その上に積み重ねることは難しい。

筆者の第一の目的は、大人数クラスにもかかわらず一人ひとりの受講者の能力を最大限に伸ばすことにあった。日本におけるこれまでの「正解主義」的英語教育の弊害を是正し、自分で考え、発信する教育を実現することであった。第二の目的は、言語は発生的に身体表現であることを忘れず、英語学習においても、リアリティを伴う指導が効果的であることを実証するこ

とである。第三の目的は、身体から発した言語が、身体を超えた抽象表現手段となることによってその使命を全うすることをふまえ、思索から生まれる自然な英語表現への導入をすることである。今回報告する事例では、履修者数が少なかったため、第一の目的はあきらめざるを得なかった。したがって、ここでは、第二の「言語習得と身体表現」、第三の「思索と言語習得」について、報告する。ドラマを使つての成果は大きく、学生の英語学習に対する自覚も大いに促された。

2. 本文

2.1 申請への経過

30名～40名クラス教育を二年経験したのち、授業改善の必要を強く感じ、自分の主専攻である（英語教育は、副専攻）ドラマ分野の作品をテキストとすることにより、大人数ながら活気ある、大学生にふさわしい思考・思索力を育成する授業が展開できると考え、平成23年度新潟大学授業改善プロジェクトに、「ドラマを

[資料・報告]

教材とした、「大学での英語教育」を申請、採択される。ただし、英語企画部に相談の結果、大学カリキュラムとの整合性を考慮し、実施対象クラスは、当初考えていた必修科目「アカデミック・イングリッシュ」ではなく、選択科目である「発展英語」となった。当該授業では、20世紀アメリカの劇作家、Tennessee Williams による、生の痛みを描いた名作 *The Glass Menagerie* をテキストとして選択した。日本語の注が付いていることが望ましいと判断し、EIHOSHAによる教科書版を採用することとした。

申請した授業運営計画詳細は、以下のとおりである。

2.2 授業計画詳細

2.2.1 対象授業：人文学部「発展英語」

2.2.2 コンセプト：

- (1) 多人数が「同時」に、「学期を通して継続」できる作業をする。
- (2) この作業は、「自立的、個別的」である。
- (3) この学習法は、「身体に根ざしつつ身体を超える」言葉の本質に即したものである。

2.2.3 目的：

- (1) 英語の発音能力、英語表現の理解力(読解力)、英語コミュニケーション能力などを、身体表現と連続する自然な形で涵養する。
- (2) すぐれた作家の作品によりあぶりだされる、深部での社会や個人、現在の自分とのかかわりなどを考察し、英語表現技術の習得のためには、英語圏文化・社会を考え尊重する、自立した、創造的かつ真摯な学習態度が必要であることを学ばせる。
- (3) 学生数の多いクラスでも、履修者全員が充実感を持って学習する環境を作る。

2.2.4 教材：教材になりうるものは多々あるが、ここでは、以下の理由からストレート ドラマ・スクリプトをテキストとして使用。理由は以下のとおりである。

- (1) 英語の会話があらかじめ与えられていることで、学習への導入を容易にする。
- (2) 日常使用される自然な英語のヴォキャブラリーが習得できる。
- (3) 登場人物の一人を受け持つことで、話し手の心理を考える読解指導が可能である。
- (4) セリフのやり取りをすることで、聴き手の心

理を考える聴解指導が可能である。

- (5) 学生にとっては膨大ともいえる量の英語表現を記憶する。

2.2.5 授業運営計画：

(1) 授業の主旨を話し、学生に自立的、積極的な学習への協力を求める。初めての試みであるので、学生の協力が容易でない場合を想定し、協力への感謝としてテキストは無料配布する。記録のために授業風景をビデオ撮影するが、撮影を拒否する学生がいないかを確認する。拒否した学生は撮影しない。また、外国語習得の学習は、競争する孤独な作業ではなく、ラーニング・コミュニティでこそ成功することを話す。

(2) テキストと授業運営について説明する。今回取り上げる作品 *The Glass Menagerie* の登場人物は4名であるので、基本的な学習ユニットは4名のグループである。学生数により、一人の役を二人で担当することは可能。各グループが、配役を決め、テキストを読み込み、最終的には「テキストを理解・記憶し、発語に沿った自然な動作を伴う会話表現を再生すること」を学習のゴールとする。

(3) 授業の時間区分を設定し、それに従う。基本的には、1時間半を3部に分け、①質問(授業外学習時に起きた疑問など) ②グループ・ワーク(読み合わせ。英語表現の理解・確認を含む) ③クラス・ワーク(代表グループの読み合わせと、質問。教員からの質問・解説を含む。)各作業へのコミットメントを評価する。英語理解確認、難しい表現解説、作品背景解説は、全クラス単位で①、②の間に行う。

(4) 作品の映画ヴァージョンを授業中には鑑賞できないと予想される(時間不足)ので、授業外に鑑賞するよう課題を出す。いずれ、適切な時期に(役作りを始めてしばらく経ってから)、クラスで、一回の時間内で映画(部分)を観る。各学生に、注目したいポイントを決めて観よう指導する。自分の学習の参考にすることが目的。

(5) 試験は、総合的学習の成果が教員・学友の誰にでも判定されうるプレゼンテーション形式とし、当該授業における継続的な学習努力の成果を明らかにする。学生は、レポートで、自己評価を行う。この評価も、学期末の成績の対象とする。

(6) グループ作業時には、教員はグループを回り、発音指導、イントネーション指導、内容質問などを行うとともに、個人評価並びに、グループ評価をする。

[資料・報告]

(7) 学習者を、ドラマのシーンや登場人物数、さらに、各学習者の希望・これまでの学習歴・習熟度を考慮に入れ、教員が判断する最善のメンバー構成で、最高のラーニング・コミュニティができるよう配慮しつつグループに分ける。グループは、体を動かせる空間と、隣のグループからの適切な距離を保って集合する。教員を教壇に置き、学生がその前に列をなして座る授業から解放する。

(8) 学習効果の確認のために、原則として毎週授業風景を撮影してもらう。予算を低めに計上したので、予算の許す範囲で最善を尽くす。15回目の授業は、ビデオ録画を見て、各学生の進歩を確認し合う。

(9) “1時間半の授業では短すぎる”と学生が感じる充実した授業を運営することが大切である。周到的なティーチング・プランの作成、機器設置や机の移動など、授業前の準備をしっかりと行い、授業中は、1分たりとも無駄にはできない。

付記：授業中の使用言語は、受講者のレベルを考慮し、テキスト音読以外は、原則として日本語とするが、クラスの英語レベルが高い場合には、授業全体あるいは一部を、英語で行うことにより、さらなる学習成果を期待する。

2.3 授業の進行と収録

2.3.1 授業の進行：

通算15回の授業のうち、14回をビデオに収録した。学生の変化を記録し、平成23年度授業改善プロジェクト報告会にて、以下の資料などを提示、報告した。資料1は、全授業の進行を記したものである。

テキスト：

The Glass Menagerie by Tennessee Williams

DVD scenes (資料1)

Video	Date	Time	Memo
I 1	4.19-1		Introduction、機器チェック
2	4.19-2	33min.	pp5-6 を読むが、声小さい
3	4.19-3	28min.	Act1, scene1 無作為配役
4	4.26-1	1 min.	Amanda と Laura 交代
5	4.26-2	16 min.	p7 少し表情が出てきた
6	4.26-3	49 min.	'Blue roses' の image について

4月19日の記録抄録：

- 役を仮に決める。ミスキャストとわかり、交代する。
- ひたすら読み合わせ。意味不明で、辞書を引く。
- 発音がめっちゃめっちゃであることがわかり、テープを聞く。授業外にも聞く。
- 自分の発する言葉のイメージを捕らえる。例えば、Blue roses など。
- 隠喩を学ぶ。例えば、“Malvolio the Magician”, “coffin” など。
- 相手のリアクションを読み取る。こう考えているのかな？など、目を追うにつれて、理解の段階が進む。自宅学習（予習、復習）の必要性も痛感する。

II	7	5.10-1	22min.	T.W. 伝記風 video 鑑賞
	8	5.10-2	60min.	Scene3 読み
	9	5.17-1	44min.	Scene4, 報告書の書き方 (毎週提出)
	10	5.17-2	22min.	p47~読み。話題の中心人物の重要性

III	11	5.24-1	33min.	Scene6 前半 読み 個人差大
	12	5.24-2	56min.	Scene6 後半読み 登場人物解釈
	13	5.31-1	1min.	ちよつとだけ動き
	14	5.31-2	7min.	Scene7 ありささん join
	15	5.31-3	12min.	Jim & Laura
	16	5.31-4	24min.	Scene1 に戻る

IV	17	6.07-1	60min.	動きをつける。Scene1 より
	18	6.14-1	60min.	Scene の重要さについての意見出る 「立つと言葉を言いやすい」との発見
	19	6.28-1	0:11	今後のスケジュール確認

V	20	7.12-1	49min.	Text を見ない努力 動きも
	21	7.12-2	28min.	日本語で Scene4
	22	7.19-1	43min.	小道具の用意アリ (自主的に)
	23	7.19-2	01min.	
	24	7.26-1	11min.	Scene4 Text 無しで
	25	7.26-2	0:22	Peer への配慮も
	26	7.26-3	14min.	最終授業

2.3.2 学生のレポート

学生は、劇中、劇中で自分が何を言っているのか、話者の気持ちや考えを書き記す。学生の記述例は、スペースの都合で本報告書末に添付する。このような形のレポートを毎週書き、提出することで、はじめは戸

[資料・報告]

感が見られたが、どんどん書けるようになっていった。(報告書末資料2)

台詞を言うとき、自分が言っていることでもあり、他者(登場人物、ならびに、作者)が言っていることでもあるという奇妙な感覚は、日本人のアイデンティティを持って英語を話す違和感にも共通すると思われるが、劇中での他者理解は、「英語を発する自分という他者」を受け入れる下地となることが、学生の様子から分かった。

2.3.3 クラス風景

ビデオに保存したシーンのうち、3枚を本報告書末に添付する。少数の写真からも、明らかに、英語運用能力の進歩が読み取れる。(報告書末 資料3)

2.4 まとめ

履修者は、ドラマのなんたるかを知らない学生たちばかりであったが、授業の意図はおおむね達成され、学習者は、事実表現、感情表現、思考表現などさまざまな会話体の英語をリアル・ライフに即した形で身に着けると同時に、作品によりあぶりだされる、深部での個人や社会、現在の自分とのかかわりなどを考察し、こうした作業をとおして、いまだ「台詞を憶えて発する」段階ではあるが、英語に対して自己を解放し、英語運用能力の向上につながった。履修学生たち全員が、「コミュニケーションをとることが必要なこの授業で、自分自身のコミュニケーション能力が向上した」「口から言葉を自然な形で発することで、言葉は憶えられるとわかった」「繰り返して読むうちに登場人物の感情がすっと理解できるようになった」など、初めての体験を高く評価している。

ただ、いずれの学生も、もっと履修者が多ければ、グループを複数作り、より一層楽しく学べたであろうと、残念がっていた。グループ学習は、ラーニング・コミュニティの形成には、非常に有効な手段であり、学生にも人気があり、コミュニケーション科目においては特に、教育効果も高い。グループごとにシーンを分担して担当し、授業後半で繋いでみると、英文解釈にも新たな発見があったことと思うし、グループを離れ、役ごとにその役について討論することも、ピア同士のよい刺激にもなり、授業効果が倍増する可能性は高いのであるが、今回は、残念であった。討論は、学生のレベルに応じ、英語でも、日本語でも効果がある。優れたドラマ作品のテーマは多角的であり、学生の思

考を促すからである。

こうした多様な作業を通じ、学習者は、英語表現技術の向上のためには、英語文化・社会を考察し、これらを尊重する、自立した、創造的かつ真摯な学習態度が必要であることを学んでいくはずだ。

なお、ドラマ作品は、慎重に選ばれなくてはならないことを付記しておきたい。一見、学生の喜びそうな、エンタテインメント作品に安易に流れることなく、あらかじめ、学習者の所属学部、レベルなどの基本的情報を得たうえで、内容の難度、作品の長さ、テーマについて熟慮し、大学半期の授業にふさわしい作品を選ぶことが大切である。

謝辞

この授業改善の試みを実施するに当たっては、新潟大学英語企画部のご理解とご協力が大きかったことについて、心より感謝し、お礼申し上げます。また、非常勤講師の申請はこれまで例がないと言われた中、授業改善プロジェクト審査委員会の委員の皆様があえて採択に踏み切ってくださいしたことにより、プロジェクトが実施できたことにも深く感謝し、お礼申し上げます。履修学生たち、ビデオ撮影にあたった青木ありささん、教務担当の渡辺さん、お疲れ様でした。

さらに、長年、ドラマを英語教育用テキストとして取り上げることに興味を示し、一緒に楽しんでくれた東京女学館大学、同短期大学、放送大学、新潟英語学習グループ「キャロット」の学生・生徒のみなさん、ご協力いただいたスタッフの皆様にも、この紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

また、ピア同士が対面する形での授業、あくまでも学習者中心の英語教育の手法は、アメリカ、ヴァージニア州の教育機関 World Learning に所属する大学院である School for International Training で、徹底的に訓練を受けた。記して感謝したい。

2013年11月1日受理

Advanced English with Ichikawa
The Glass Menagerie についての確認事項/表現

Name: _____ (Tom)

Scene 4

Outline:
酔っ払って帰宅したトムは、ロウに昨夜の出来事を話す。朝にカリー、トムはロウにあらわした通りアマゾンに旅行する。トムはアマゾンに旅行中にカリーは副夫が足りなかったことを話すが、アマゾンに誘われる。その後アマゾンには無理矢理にカリーがトムはロウの相手探しを引継ぎることになる。

My feeling:
I regret what I said to my mother. But warehouse is not satisfactory to me. Because there is no adventure. Adventure is the most important thing for a man! This is the instruct. Besides she asked me to look for "Gentleman caller".

What I did:
I got drunk and came home. Next, I talked with Laura about Movie and Magic. In morning, I apologized to my mother. I talked about a adventure, but she denied it. In addition, she asked me to look for Laura's husband.

What I said:
Goody, goody! Pay'er back for all those "Rise an' Shines"
I'll rise - but I won't shine.
I go to the movies because - I like adventure. Adventure is something I don't have much of at work, so I go to the movies.
Then most young men are not employed in a warehouse.
Man is by instinct a lover, a hunter, a fighter, and none of those instincts are given much play at the warehouse!

資料2-1

No. _____
Date _____

SCENE 7. What I said LAURA

"Hello." "Yes, Yes, Thank you." "Thank you." "Oh - oh, any- where -" "No." "Oh, no." "What?" "Oh..." "Oh - yes."
"I - will." "I can - see you." "Yes." "No, thank you."
"No, I didn't." "I - don't know." "I believe I will take a piece of gum, if you - don't mind. Mr. O'Conner, have you - kept up with your singing?" "Yes, I remember what a beautiful voice you had." "Oh, yes! Yes, very often... I - don't suppose - you remember me - at all?"
"Wasn't it - Blue Roses?" "I didn't expect you to. You - barely knew me!" "Yes, we - spoke to each other." "Oh, right away! When I heard your name I thought it was probably you. I knew that Tom used to know you a little in high school. So when you came in the door - well, then I was - sure." "I don't know what to say, I was - too surprised!" "Yes! Yes, isn't it, though..." "Yes, we did." "It was - singing - chorus!" "I sat across the aisle from you in the Aud." "Mondays, Wednesdays and Fridays." "Yes, it was so hard for me, getting upstairs. I had that brace on my leg - it clumped so loud!" "To me it sounded like - thunder!" "And everybody was seated before I came in. I had to walk in front of all these people. My seat was in the back row. I had to go clumping all the way up the aisle with everyone watching!" "I know, but I was. It was always such a relief when the singing started." "I was out of school a little while with pleurosis. When I came back you asked me what was the matter. I said I had pleurosis - you thought I said Blue Roses. That's what you always called me after that." "Oh, no - I liked it. You see, I wasn't acquainted with many - people..." "I - I - never have had much luck at - making friends." "Well, I - started out badly." "Yes, it sort of - stood between me -" "I know, but it did, and -" "I tried not to be but never could -" "No, I - I never could!" "Yes - I guess it -" "Yes -" "Yes!" "Here you are in The Pirates of Penzance!" "So - beautifully!" "Yes, yes - beautifully - beautifully!"

資料2-2

Scene 4に関する学生の報告（資料2-1）、および、Scene 7に関する学生の記述（資料2-2）。

Outlineを客観的に書くほか、登場人物として、自分（当該人物）がどのような感情を抱き、何を言い、何をしたかを書いている。授業回数が進み Scene 7になると、“What I said” の項目だけで一ページになるほど、どんどん書き進めている。

これら2枚のペーパーは、異なる学習者のものであるが、それぞれの学生が同様のペースで学習を自発的に進めた。

[資料・報告]



資料3-1 2012.4.26

対面式に机を並べたものの、下を向き、テキストに、顔がくっつきそう。通常、多くあるクラス・スタイル。



資料3-2 2012.7.26

“He performed wonderful tricks, many of them, such as pouring water back and forth between pitchers.”

手が動く。その動作に誘われて、聞き手の手も動く。



資料3-3 2012.7.26

“A little silver slipper of a moon. Look over your left shoulder and make a wish!”

英語表現の奥にある心情を理解し、心がこもっている。